

検証

崩拓銀

<7>10.10.25

一九二二年春、東洋信金の一任していた。「カブトは架空預金証書偽造事件、富士大丈夫です」と海道は太鼓判銀行不正融資事件、そして任友銀行が絡むイトマン事件

寒風

「話が違う」。佐藤は思た。「話が違う」。佐藤は思た。店内の一室で海道弘司常務とわす語気を強めた。年々、売り上げを倍々ゲムで伸ばし、九一年三月期決算では一千億円企業の仲間入りをしたカブトだが、その急成長の裏には実はカラクリがあった。

カブト案件について佐藤は海道とその部下の総合開発部その経営パターンはこう



火の粉回避へ一枚舌

より建築受注と土地・建物売却の両方の代金を売り上げに計上できる。この手法はカブト社長の佐藤茂の独特な哲学による。佐藤が拓銀と取引を始めたばかりの三十三歳のころ、ある行員は佐藤にこう諭されたこと

だ。まず、地上げ部隊の関係会社に土地を取得させ、そこからカブトが建物建築を受注。完成後に土地・建物を一括して買い上げ、それを再び関係会社に転売する。これに

幻惑

まばゆい光線に、拓銀は行く先を見失ったかのように迷走を始める。拓銀本店自

全体に波及する。カブトが描いた田環の構図は、バブル崩壊で急激に回転が鈍くなって

このころ拓銀からカブトへの融資残高は表面上は五百億円程度。だが、これ以上にカブト関係会社への地上げ資金

は、拓銀は割当先に二百億円超を融資した。また、九一年以降のエイベックスリゾートは知人にこう漏らしている

「敬称略、肩書は当時」

(拓銀問題取材班)